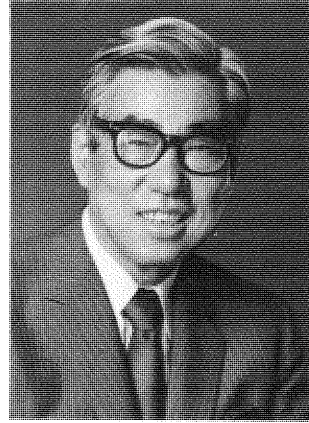


祝辞

三宮センター街三十年史刊行に寄せて



兵庫県知事

畑井 時忠

戦後三十年―その歴史とともに歩み育った三宮センター街は、いまや神戸はもとより、日本の顔となりました。この華麗なるファッションタウンは、人と人との出会いをつくり、交流の輪をひろげていくなかで心の乾きをうるおし、暮しに夢と希望をもたらしてくれました。

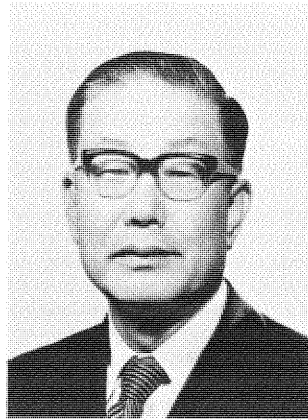
もはや商店街は商品を買求める場としてではなく、新しい人間を再生する場であり、コミュニケーションを創造する場ではなくてはならないでありましょう。

日々国際化する社会、その先頭をいく旗手として三宮センター街のはれやかな前進に心からの拍手をおくります。

ここに三十周年を迎えられるにあたり、改めて関係者各位のご尽力に深く敬意を表しますとともに、さらに一層のご発展を心から祈念してやみません。



三十年史発刊を祝して



神戸市長

宮崎辰雄

三宮センター街がめでたく創立三十周年を迎えられ、このたびその記念誌を発刊されますことを心からお祝い申し上げます。

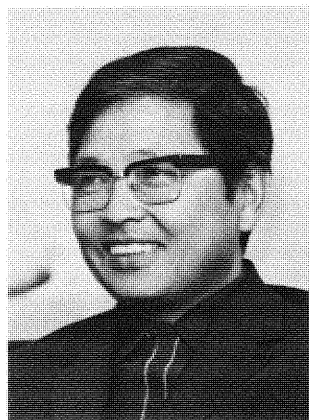
三宮本通り商店街として親しまれていた「三宮センター街」が現在の名称で呼ばれるようになったのは昭和二十一年だと聞いておりますが、終戦を契機としてこの頃から三宮センター街の方々はどこよりも早く復興に取組まれたことを思い出します。以後三十年間、月刊PR誌「センター」を発刊されたり、「さんプラザ」、「センタープラザ」をはじめとして商店街近代化に努力された結果、今では神戸の中心商店街として全国に名前を知られるまでに成長されてまいりました。

三十年の間には、消費者意識、交通体系、競合商業地区の状況などが相当変わってまいりましたが、これからの三宮センター街におかれましては、大阪商圏に対抗しつつ、神戸の都心商店街として発展していただかねばなりません。

三十年のはえある伝統を築かれた皆様がさらにめざましい飛躍をとげられますことを心からお祈りいたしまして発刊お祝いの言葉といたします。

祝辞

三十年一世



陳
秉
臣

センター街は、戦後の神戸の復興と繁栄のシンボルであるといつてよいだろう。いまでもときどきセンター街を歩いていて、ふとそのあたりが瓦礫の原であった空襲直後の情景を思い出すことがある。よくもここまでやったという感慨が深い。同時に三十年という歳月の重さを、身にひしひしと感じる。

二十年ひと昔ということばがあるが、中国では「三十年を一世と称す」という考え方がある。たとえば何某の五世の子孫という記述があれば、その一世の平均を三十年とみて、何某がその家をはじめから百五十年たったところだと、大雑把にかぞえるのだ。人間には幼年、少年時代があり、勉学期、そして修業期がある。その時期には父親は健在であることが多い。父親の隠居あるいは死去によって家督を継ぎ、それをわが子へ渡すまでの期間を、ほぼ三十年とみたのである。平均寿命が大幅にのびた現在では、このかぞえ方にはいささか問題があるかもしれない。それでも三十年とい

えば、やはり一つの大きな区切りであることにはかわりはない。

「世」という字そのものが、十の字を三つ重ねて三十をあらわしている。二十を廿と書くのは、現在でもよく使われ、三十を卅とするのもよく見うけられる。だが、「世」の字をよくみると、廿にもう一つ十を加えた形だが、この最後の十はカーヴをえがいて、ずっとのびている。ここがこの字の味わい深いところである。

三十年という長い歳月に敬意を表して、一種の詠歎がこめられて、最後の十がのばされたと解してよい。私は「世」という字にたいしては、最後の線が長くひかれ、折れまがることによって、つぎの世代へうけつがれることを暗示している、という私的な解釈をしている。

センター街では大きな改造がおこなわれた。人によっては、これが大きな区切りで、生まれかわったという表現をしているようだ。たしかに町としては、一世から二世へ移りつつある。しかし、私はセンター街創業の精神をここで思い返して、区切りよりも「世」の字のもつ継続のほうに重点をおきたい。みごとにうけつがれることを、心から期待する。

